

日本語の音韻変化
—— 上代から現代まで ——

柴 田 知薫子

Diachronic Phonology of the Japanese Language:
Ancient Times through Modern Times

SHIBATA Chikako

日本語の音韻変化

—— 上代から現代まで ——

柴田 知薫子
群馬大学共同教育学部英語教育講座
(2021年9月29日受理)

Diachronic Phonology of the Japanese Language: Ancient Times through Modern Times

SHIBATA Chikako
Department of English, Cooperative Faculty of Education, Gunma University
(Accepted on September 29th, 2021)

Abstract

The Japanese vowel system underwent processes of merger during the Nara period, while voiced consonants split off from voiceless counterparts by the Edo period. The number of accent types has been decreasing since ancient times, merging into two in the present-day Tokyo dialect. This paper aims at discovering universal principles of phonological change such as split, merger, rotation, by comparing the sound system of the Japanese language with that of other languages.

1. はじめに

柴田 (2020:107) では、自然言語の音韻体系は「常に最適な状態を目指して変化している」と結論付けた。最適な状態とは、音韻体系内で対立が維持されている状態である。これを裏付ける事実として、音韻変化には音素間の対立を維持しようとするものが多い。Labov (1994) は、音韻体系に影響を及ぼす変化を分離／併合／循環に分類し、これらを相補的な音過程として捉えている。分離過程が対立する音素の数を増やすのに対して、併合は対立する音素を減らす。音素が併合を避けながら体系内を移動する過程が循環である。

自然言語は、これらの相反する音過程の中から何をどのように選択しているのだろうか。上代から現代に至るまでの日本語の音韻変化を概観すると、母音体系で併合、子音体系で分離過程が観察される。さらに上代に先立つ日本祖語の時代まで遡ると、韻律構造においてはアクセントを構成する要素が母音長から語声調へ、語声調から下げ核へと循環する過程が見られる。本稿は、日本語の音韻変化に見られる言語事実を他言語と対照することによって、自然言語が選択する音韻変化の法則性を導き出すことを目的とする。

2. 母音の併合

日本語の歴史は古代・中世・近世・近代に区分されることが多いが、古代をさらに上代（奈良時代以前）と中古（平安時代）に区分することがある。文字資料がまとまって見つかるのが8世紀以降であることから、本稿では上代を奈良時代に限定し、それ以前を日本祖語の時代と呼ぶことにする。¹

上代日本語で8種類の母音が区別されていたという仮説は、万葉仮名を規則的に使い分けた上代特殊仮名遣を根拠とする橋本進吉の研究以来、長く定説となっていた。

(1) 上代特殊仮名遣による書記法

	キ	ケ	コ	ソ	ト	ノ	ヒ	ヘ	ミ	メ	ヨ	ロ
(甲類)	伎	祁	古	蘇	斗	怒	比	幣	美	賣	用	漏
(乙類)	紀	氣	許	曾	登	能	斐	閉	微	米	余	呂

伝統的な日本語学では、イ段・エ段・オ段の音節に甲乙2類の区別があると主張される。これに対して松本(1975)は、この書記法を音声的な差異に従って書き分けられたものとみなし、音韻的な区別を完全に否定して上代5母音説を唱えた。すなわち、甲乙の音節の差異は音節核の母音の相違によるものではなく、頭子音の硬口蓋音化の有無によるものであると主張する。たとえば甲類キは口蓋化した [ki]、乙類キは [ki] として音声化する。同様に甲類ケは口蓋化した [k'e]、乙類ケは [ke] として音声化する。したがって、乙イの [i] も甲エの [e] も /k/, /p/, /m/ という暗音性子音のあとに生じる条件異音にすぎないということになる。²

服部(1976)は、イ段とエ段については松本と同じ立場に立つが、オ段の2類の母音だけは音韻的な区別とみなして上代6母音説を提唱した。(1)の甲オと乙オが両唇音 /p/, /m/, /w/ を除く全ての子音のあとで対立を成している事実が、同一音素の異音ではなく異なる母音音素とみなす根拠となっている。³ イ段とオ段を2類と認めながら甲エを複母音とみなして単母音体系から除外する森(1981)の7母音説を含めると、上代日本語の母音体系については5母音説から8母音説まであり、未だ論争に決着がついていない。

(2) 上代日本語の母音体系

a. 8母音説	b. 7母音説	c. 6母音説	d. 5母音説
i ī u	i ī u	i u	i u
e ē ö o	e ə o	e ö o	e o
a	a	a	a

筆者は、服部四郎が示した根拠から(2c)の6母音説を支持する。英語史においては、古英語に先立つ先史時代については8母音体系を唱える研究者がいるものの、古英語の母音体系については6母音説が定着している。

(3) 古英語 (Old English : 700-1100) 以前の母音体系

a. 8 母音体系		b. 6 母音体系	
i	y	u	
e	ø	o	
æ	ɑ	æ	ɑ

(3a) の円唇前舌高母音 [y] は円唇後舌高母音 /u/ がウムラウトの結果として前舌化した条件異音であり、同様に円唇前舌中母音 [ø] は円唇後舌中母音 /o/ の異音である。これらの異音は、ウムラウトを引き起こした前舌母音を含む接尾辞が消失したあと変異音化の条件となる環境を失って一時的に音素化したものの、古英語期 (OE) にはいずれも円唇性を失って [y] は /i:/ に、[ø] は /e:/ に併合した。

- (4) a. OE mūs > ModE mouse mūsi > mȳs > OE mīs > ModE mice
 b. OE fōt > ModE foot fōti > fōt > OE fēt > ModE feet

(4) の例は、(3) の短母音 /y/, /ø/ に対応する長母音 /y:/, /ø:/ が非円唇化して /i:/, /e:/ に併合したあと、近代英語期 (ModE) に大母音推移を経てそれぞれ /ai/, /i:/ に変化した事実を示している。

上代日本語の母音体系が6母音であったとすると、平安時代までに [o] と [e] が併合して5母音体系が確立したことになる。それでは、上代以前の日本語はどのような母音を有していたのだろうか。琉球語との比較から日本祖語を3母音体系と推定する研究者は /i/ から /e/, /u/ から /o/ が分離したと考えている。一方、服部四郎は上代の /e/ を /ai/ に由来するものと考えている (服部・上野 (2018 : 63))。

(5)	日本祖語	奈良朝中央	日本祖語	奈良朝中央
	*i	→ /i/ (甲)	*ia	→ /e/ (甲)
	*e	→ /i/ (甲)	*ai	→ /e/ (乙)
	*ə	→ /ö/	*au	→ /o/
	*a	→ /a/		
	*u	→ /u/		
	*o	→ /u/		

服部によると、日本祖語の *e と *o がそれぞれ /i/ と /u/ に狭められたのは、二重母音 *ai, *au から新たな中母音 /e:/, /o:/ が生まれたからである。そうすると、*e と *o の上昇は新たな中母音との対立を維持するための循環過程であり、上昇の結果それぞれ /i/, /u/ と併合したことになる。[ai] が /e/, [au] が /o/ に変化する過程はフランス語との並行性があり、フランス語に由来する英語の語彙にそれぞれ /ei/, /o/ として保存されている。一方、現代日本語の口語表現にも以下のような母音融合が観察される。

- (6) a. 高い [takai] > [takee] 長い [naŋai] > [naŋee]
 b. 高くて [takakute] > [takaute] > [takoote] 長くても [nagakute] > [nagaute] > [nagoote]⁴

日本祖語の時代に新たな母音が発生して母音体系に混雑が生じた結果、対立を維持するために上昇した中母音 /e/, /o/ が高母音 /i/, /u/ と併合したとすれば、近代英語期における大母音推移の循環・併合過程との間

異なる過程がある。

- (9) a. /p/ > [ɸ] > [h] : [pi] > [ɸi] > /hi/ [çi] 「日」
 b. /p/ > [b] > /w/ : [kapo] > [kabo] > [kawo] 「顔」

(9b) のように語中で有声化した /p/ が [b] から [w] に変化した過程は「ハ行転呼」と呼ばれ、出力の /w/ は /a/ 以外の母音の前では消失した。一方、語頭の /p/ は /u/ 以外の母音の前では [+labial] の特徴を失って近世までに声門摩擦音 /h/ に弱化した。その結果として /p/ は和語の語彙層から消えることになったが、漢語や外来語には存在するため日本語の子音音素として現代語に残り、パ行音はなぜか「半濁音」と呼ばれている。⁵つまり、日本語の /h/ は /p/ の異音から生じて音素として分離したことになる。

実際には、両唇破裂音 /p/ は和語の語彙層から完全に消えたわけではなく、(10a) のような擬音・擬態語に生起するほか、(10b) に示したように促音のあとに現れることが知られている。

- (10) a. パラパラ ピカピカ プンブン ペコペコ ポタポタ
 b. あわれ／あっぱれ にほん／にっぽん やはり／やっぱり
 c. 第一波 第二波 第三波 第四波

(10c) の「第三波」はNHKでも民放でも「だいさんぱ」と読まれているが、「第四波」については保守的なNHKが「だいやんぱ」と読んでいるのに対して民放は「だいやんは」が多い。柴田(2020: 103)で述べたように、平成世代は「3分」「4分」を「さんぶん」「よんぶん」と発音する傾向があり、「1分」「6分」のような促音のあとでのみ /p/ と交替する。他方で昭和世代の多くが「さんぶん」「だいやんぱ」と発音するのは、[p] と [h] が互いに異音の関係にあつて語彙的交替形を成しているからであり、その世代の脳内で /p/ と /h/ がまだ完全に分離していない可能性を示唆している。

4. 声調とアクセント

併合の過程は、日本語のアクセントの推移にも観察される。11世紀のアクセント辞典といわれる『類聚妙義抄』によると、2音節語には少なくとも5通りのアクセントがあったと考えられる。

- (11) 日本語における2音節語のアクセントの推移 (Vovin (2008: 141))

	類聚	京都	東京
2.1 <i>fasi</i> 端	HH	HH, HH-H	LH, LH-H
2.2 <i>fasi</i> 橋	HL	HL, HL-L	LH, LH-L
2.3 <i>fana</i> 花	LL	HL, HL-L	LH, LH-L
2.4 <i>fasi</i> 箸	LH	LH, LL-H	HL, HL-L
2.5 <i>faru</i> 春	LF/LH	LF, LH-L	HL, HL-L

(11)において11世紀のアクセントを現代日本語の京都方言および東京方言のアクセントと対比してみると、京都方言では2.2と2.3が併合してアクセントの型が4種類に減少している。⁶東京方言ではさらに別の変化を経て、2.2と2.3および2.4と2.5がそれぞれ併合してアクセントの型が3種類に減少していることがわかる。

東京方言には2.1のように下げ核のない平板型を含めて、理論的にはn音節の語に対してn+1通りのアクセントがあるとされる。以下では、古代のアクセントをより多く受け継いでいる京都方言におけるアクセントの推移を3音節名詞について辿ってみることにする。

古代の多音節名詞は、高く始まって下げ核のある拍（モーラ）まで高く平らに続く高起式（または平進式）と、低く始まって昇り核のある拍の直前で上昇する低起式（または上昇式）という2通りの式音調によって、語全体のアクセント型が影響を受ける。したがって、高声調（H）と低声調（L）および下げ核（ $\bar{\quad}$ ）と昇り核（ $\acute{\quad}$ ）が弁別要素となる（木部（2016））。⁷

(12) 3音節名詞におけるアクセントの推移

	古代	中世	近世	現代
高起式 (H)	a. カタチ	カタチ	カタチ	カタチが (HHHH)
	b. チ $\bar{1}$ カラ	チ $\bar{1}$ カラ	チ $\bar{1}$ カラ	チカラが (HLLL)
	c. アツ $\bar{1}$ キ	アツ $\bar{1}$ キ	ア $\bar{1}$ ツキ	アツキが (HLLL)
低起式 (L)	d. ココ $\bar{1}$ ロ	コ $\bar{1}$ コロ	コ $\bar{1}$ コロ	ココロが (HLLL)
	e. ヲトコ	ヲト $\bar{1}$ コ	ヲ $\bar{1}$ トコ	オトコが (HLLL)
	f. ウ「サギ	ウ「サギ	ウサ「ギ	ウサギが (LLHL)
	g. カ「ブ $\bar{1}$ ト	カ「ブ $\bar{1}$ ト	カ「ブ $\bar{1}$ ト	カブトが (LHLL)

中世に生じた最も顕著な変化は、語頭にLが連続する語に生じた「語頭隆起」と呼ばれる現象で、低起式の(12d)と(12e)がその影響を受けている。(12e)の2拍目が隆起しているのは(12d)との対立を維持するためであったと考えられるが、近世に入ると3音節語において下げ核の左方移動が起こり、ヲトコはココロと同じアクセント型に落ち着いた。この左方移動は(12c)のような語にも生じたため、高起式のアツキが同じく高起式(12b)のチカラと同じアクセント型になり、近世までに(12c)、(12d)、(12e)が(12b)と併合して同じアクセント型に属することになった。その結果、古代には少なくとも7通りあった3音節名詞のアクセント型が、現代京都方言では併合により4種類に減少したことになる。音節数が2から3に増えてもアクセント型の数が変わらないのは、多音節化の進行にともなってアクセントの違いだけで識別される語の最小対が減少したためと考えられる。

現代東京方言のアクセントには式音調の影響はなく、下げ核だけが弁別的である。(12a)のカタチと(12f)のウサギが同じ平板型のアクセントを持つ一方、(12d)のココロの下げ核が第2音節から第3音節へと推移しつつあり、(12b)チカラ・(12c)アツキ・(12e)オトコと併合すれば3音節名詞のアクセント型は3種類に減少することになる。さらに、平成時代以降に一般化した3音節の短縮名詞には2通りのアクセント型しかない。

(13) a. HLL	ア $\bar{1}$ プリ	サ $\bar{1}$ プリ	レ $\bar{1}$ ベチ			
b. LHH	アプデ	エゴサ	ステマ	セトリ	ソシャゲ	ボカロ
c. LHL	エモ $\bar{1}$ い	なつ $\bar{1}$ い	はず $\bar{1}$ い	むず $\bar{1}$ い		

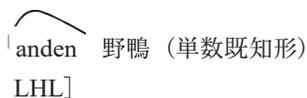
非複合語に由来する(13a)の3音節短縮名詞は語頭に下げ核があるのに対して、より生産的な(13b)の3音節短縮名詞はすべて平板型のアクセントを持つ。⁸ ボーカロイドは英語では複合語とはいえないが、複合名詞とみなされて平板型アクセントを受けている可能性がある。他方、(13c)の3音節短縮形容詞は形容詞本

来のアクセント型を保持している。

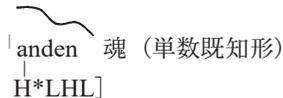
以上のように、日本語の3音節名詞のアクセントを古代から現代まで観察してみると、併合によってアクセントの型が一貫して減少していることがわかる。現代の東京方言では、アクセントは下げ核のある「起伏型」と無核の「平板型」に分類され、前者についてはどこに下げ核があるかが問題とされる。しかしながら、複合語や外来語のアクセントが語末から3番目の音節に規則的に置かれるようになってきていることから、今後は下げ核の位置に関する情報が弁別的な機能を失い、日本語の語彙はアクセントのある語とない語に2分される可能性がある。

ゲルマン語派に属する北欧語は、強勢音節に声調が結び付くトーン・アクセントを特徴とする言語である。Riad (2003) によると、語彙的なトーンは古ノルド語後期に縮小した第2強勢のピッチ部分から発達したものであるという。このトーンを持つ有標なアクセントをアクセント2と呼ぶのに対して、特定の情報を持たない語彙のアクセントをアクセント1と呼ぶ。

(14) a. アクセント1



b. アクセント2



(14b) のアクセント2は強勢音節に語彙的なトーン H* が結び付いているため、音調曲線のピークが2つになる。この曲線の違いが ¹tanken (タンク) 対 ²tanken (思考)、¹stegen (歩み) 対 ²stegen (梯子) のような語の意味を区別する機能を果たしている。北欧語と同様にゲルマン語派に属するオランダ語には、名詞の数を語声調の有無によって区別している方言が存在する (Gussenhoven (2000))。日本語の名詞も、語彙的な H* トーンのある語とない語に分かれ、ある語については語末から3番目の音節にアクセントが規則的に置かれるようになるかもしれない。平成から令和にかけて生まれた (13a) はアクセントのある語、(13b) はアクセントのない語で、前者は語末から3番目の音節にアクセントが置かれている。

アクセントを構成する要素は高さ (pitch)・長さ (duration)・強さ (intensity) で、このうちのどの要素を使うかは言語によって異なる。現代英語の強勢アクセントは3要素をすべて利用しており、長さは強さに依存するが、高さとは互いに独立の関係にある。上述の北欧語のトーン・アクセントは第2強勢が持っていた高さの要素が声調に変化したものである。一方、オランダ語にはアクセント2の語声調が長さとして再解釈されていると考えられる方言がある (Heijmans (2003))。このようにアクセントの3要素は相補的な関係にあって、強勢が語声調に再解釈されたり、語声調が母音長に再解釈されたり、音節長の対立が語声調の有無に置き換わったりする過程は、朝鮮語やエストニア語などゲルマン語派以外の言語にも通時的・共時的に観察される (Kwon (2003), Lehiste (2003))。これらの過程は、アクセントの一要素が弁別機能を失いかけると他の要素にその機能を任せようとする循環過程と言えるだろう。

現代の日本語は長母音と短母音の区別があるために長さの要素は使うことができず、高低差のみによってアクセントを実現している。高低差すなわちピッチの源は語声調であるが、声調はいったい何に由来するのだろうか。この根源的な問いに対して Vovin (2008: 150) は、「分節音の持つ何らかの素性が別の素性と併合するか完全に失われるかした結果、その痕跡がトーンまたはピッチ・アクセントという形で残った」と述べている。日本語については、本土方言と琉球方言が分かれる前の日本祖語の時代に存在したと仮定される語頭の長母音と有声子音が、低声調 L の源であるという。この推論が正しいとすると、上代の日本語に母音の長短の区別がなく、語頭に濁音が立たないという事実が説明できる。

現代の琉球方言には、語頭の長母音が別の方言の語頭アクセントに対応している例がある。

(15) 現代琉球方言における長母音とアクセントの対応関係 (Vovin (2008: 151))

	針	影	婿	花	雲
朱里方言	<u>ha</u> :i	<u>ka</u> :gi	<u>mu</u> :ku	<u>hana</u>	<u>kumu</u>
今帰仁方言	pha i	ha gi(:)	mu h(:)	phana:	kumu:

朱里方言において低声調 L で始まる「針」・「影」・「婿」の長母音が、今帰仁方言の語頭アクセントに対応している。他方、「花」と「雲」は語頭に長母音もアクセントも持っていない。朱里方言が日本祖語の長母音を保持しているとする、今帰仁方言では語頭の長母音がピッチ・アクセントに置き換わったものと推定される。今帰仁方言では、母音の長短の対立が失われている。

一方、Matsumori (2008: 123) は「トーンはもともと同一音節内の子音が持っていた有声性の素性から予測可能であったものが後になって対立を成すようになったものか、あるいは母音長の対立が失われた結果それを代償するメカニズムとして発達したものか」という問いを立てている。3節で述べた通り、日本語の濁音は頭子音の閉鎖開放後の基本周波数 (F₀) が清音に比べて低くなる傾向があり、「しばた」のように第2音節に濁音を含む姓はその音節のピッチが下降するため、頭高型アクセントになりやすいという研究もある(杉藤 (1998), 佐藤 (2006))。日本祖語に語頭の濁音が存在したとすると、その子音が持っていた素性 [-tense] が上代までに低声調 L として実現するようになった可能性はある。上代において語頭に濁音が立たなくなったのは、その素性が声調に置き換わったために、語頭において清音と濁音の対立が失われた結果と考えることができる。

5. 音便変化と音節構造

上代日本語の音節構造は開音節 CV で、頭子音 C は義務的ではないが、複合などによって語中で母音が連続すると、母音融合または母音削除によって CV 音節を保持する傾向があった。⁹

- (16) a. 母音融合 naga+iki > nageki 「嘆き」
 b. 母音削除 ara+iso > ariso 「荒磯」 toko+ipa > tokipa 「^{とさわ}常盤」

この段階で漢語から CVV や CVC などの長音節が入っても、母音削除または母音挿入を経て CV 音節に適合させられたはずである。しかしながら、8世紀から10世紀にかけて生じた音便変化によって、日本語の音韻体系内部に長音節が発生することになった。Frellesvig (2010) によると、音便とは特定の音節が音声的に弱化して単一の分節音として音素的に再解釈される過程である。

- (17) a. イ音便: tukitati > tuItati 朔日
 b. ウ音便: taput^wo-si > taUto-si 尊し
 c. 促音便: taput^wo-si > taQto-si 尊し
 d. 撥音便: kagupa-si > kaNba-si 芳し cf. kaUba-si

上代の音便変化に関与したのは、暗音性子音という類を成す子音群 {p, b, m, k, g} と狭母音 {i, u} の

組み合わせで構成される音節である。(17c)の弱化過程から促音(Q)が、(17d)の弱化過程から撥音(N)がそれぞれ特殊音素として発生したあと、(17b)のウ音便から生じた母音連続が単母音化して長音(H)が発生した結果、日本語の音韻体系はCVH、CVN、CVQという長音節を獲得したのである。

音便変化は上代で完結したわけではなく、現代の日本語でも非標準的な話し言葉に観察される。

- (18) a. イ音便: ri > I おっしゃる > おっしゃります > おっしゃいます
 b. 促音便: ru > Q うるさい > うるせえ > うっせえ
 c. 撥音便: ra > N わからない > わかんない

上代とは異なり、ラ行の子音 /r/ と広母音 /a/ が音便変化に関与している。特殊音素 {I, U, H, N, Q} は単独で音節を形成することができずに直前の音節に従属するため、音便変化には音節数を減らす効果がある。(18a)の「おっしゃいます」はすでに標準化しているが、関東の方言で「す」の母音が削除されることを前提とすると、イ音便と母音削除の効果で3音節におさまることになる。こうした音節構造の変化は、リズムの単位としてモーラよりも音節を優位とする平成世代が成長するにともなって、今後も進行するものと予測される(柴田(2014))。

6. まとめ：音韻変化の法則性

日本語の音韻を上代から現代まで通時的に観察すると、母音体系では併合が生じて音素数が減少したのに対して、子音体系では阻害音から有声音が分離して音素数が増加したことがわかる。しかしながら、日本祖語の時代まで遡ってみると、母音融合から新たな母音が生まれ、その結果として母音体系内で循環過程が生じていた可能性がある。上代には存在しないとされていた語頭の濁音や長母音も、日本祖語の時代には存在し、上代までに語声調へと推移した可能性がある。

語の意味を区別するアクセントの型は、併合に次ぐ併合によって京都方言でも東京方言でも大幅な減少が続いている。これは、語の多音節化にともなってアクセントの果たす弁別機能が低下しているせいである。その一方で、上代から現代まで続く音便変化は増えすぎた音節数を減らす効果を持つ。さらに現代においては、多音節の外来語や複合語が3音節に短縮される傾向がある。

自然言語は人間が使っている限り、絶えずシステムに歪みが生じる。音韻変化はその歪みを解消し、対立が維持される最適な音韻体系を実現するための過程である。分離によって音素数が増えると循環によって併合を避け、避けきれないほど増えすぎれば併合によって音素数を減らす。日本語においては、母音音素数の減少を子音音素数の増加が補い、多音節化にともなってアクセント型の種類が減少すると音便や短縮によって音節数を減らしている。アクセントを構成する要素は母音長から語声調へ、語声調から下げ核へと循環している。言語使用者は無意識のうちに、最適なシステムを回復するためのロードマップを描いているのである。

注

1. 正確には、日本語と琉球語が分かれる前の祖先言語を日本祖語という。服部・上野(2018)によると、日本祖語は西暦紀元前後に九州の北部で話されていた言語で、同時代の近畿地方や東国地方の諸方言は奈良時代までに日本祖語系の方言に同化されていた。

2. ハ行の子音は、上代までは両唇閉鎖音 /p/ であったと推定される。その後 16 世紀までは両唇音であったが、いつ摩擦音化したかは明らかになっていない。
3. 古事記には毛 [m^wo] 対母 [mo] の対立があることから、上代以前には他の唇音のあとでも 2 類の区別があったと推論する研究者もいる (Frellesvig (2010))。
4. 現代の関西方言では、和語の語中でもガ行鼻濁音が現れない。
5. 『精選版日本国語大辞典』によると、明治 7 年の文部省「小学入門」にはパピブペボを次清音として示している。
6. 中井 (2012: 112-113) によると、現代の京都方言では 2.4 と 2.5 が併合の過程にあるという。
7. 木部 (2016: 100) は、低起式 (12f) ウサギの上昇位置が下がり目の音節まで後退した時点で、京都方言においても昇り核が消失したと考えている。その結果、現代の京都アクセントは高起式 (H)・低起式 (L) および下げ核 (l) によって区別される体系となった。
8. 「レベルがちがう (人)」に由来するレベチは、その由来が英語の派生語でも複合語でもないせいか、平成世代の間でもアクセントの揺れが観察される。
9. 子音挿入は「春雨」「小雨」「氷雨」などに限定されるため、「さめ」が「あめ」の古形だという説もある。『精選版日本国語大辞典』には「さめ」という項目がある。

参考文献

- Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*, Cambridge University Press, New York.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman, ed. (2008) *Proto-Japanese: Issues and Prospects*, John Benjamins, Amsterdam.
- Gussenhoven, Carlos (2000) "On the Origin and Development of the Central Franconian Tone Contrast," *Analogy, Levelling, Markedness: Principles of Change in Phonology and Morphology*, ed. by Aditi Lahiri, Mouton de Gruyter, Berlin, 215-260.
- 橋本進吉 (1980) 『古代国語の音韻に就いて 他二篇』岩波書店, 東京.
- 服部範子・柴田知薫子 (印刷中) 『音韻理論と音韻変化』開拓社, 東京.
- 服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音音素は六つであって八つではない」『言語』5-12, 69-79.
- 服部四郎・上野善道 (2018) 『日本祖語の再建』岩波書店, 東京.
- 早田輝洋 (2017) 『上代日本語の音韻』岩波書店, 東京.
- Heijmans, Linda (2003) "The Relationship between Tone and Vowel Length in Two Neighboring Dutch Limburgian Dialects," *Development in Prosodic Systems*, ed. by Paula Fikkert and Haike Jacobs, Studies in Generative Grammar 58, Mouton de Gruyter, Berlin, 7-45.
- 木部暢子 (2016) 「第 4 章 アクセント史」高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田弘幸『シリーズ日本語史 1 音韻史』岩波書店, 東京, 37-67.
- 小松英雄 (2014) 『日本語を動的にとらえる—ことばは使い手が進化させる—』笠間書院, 東京.
- Kwon, Kyung-Keun (2003) "Prosodic Change from Tone to Vowel Length in Korean," *Development in Prosodic Systems*, ed. by Paula Fikkert and Haike Jacobs, Studies in Generative Grammar 58, Mouton de Gruyter, Berlin, 67-89.
- Labov, William (1994) *Principles of Linguistic Change 1: Internal Factors*, Blackwell, Oxford.
- Lehiste, Ilse (2003) "Prosodic Change in Progress: From Quantity Language to Accent Language," *Development in Prosodic Systems*, ed. by Paula Fikkert and Haike Jacobs, Studies in Generative Grammar 58, Mouton de Gruyter, Berlin, 47-65.
- Matsumori, Akiko (2008) "On the Reconstruction of the Proto-Accentual System of Japanese," *Proto-Japanese: Issues and Prospects*, ed. by Bjarke Frellesvig and John Whitman, John Benjamins, Amsterdam, 103-124.
- 松本克己 (1975) 「古代日本語母音組織考—内的再建の試み」『金沢大学法文学部論集文学編』22.
- 松本克己 (1995) 『古代日本語母音論—上代特殊仮名遣の再解釈』ひつじ書房, 東京.
- 森博達 (1981) 「漢字音より観た上代日本語の母音組織」『国語学』126, 30-42.
- 中井幸比古 (2012) 「第 8 章 声調のある方言」松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古『日本語アクセント入門』三省堂,

- 東京, 106-123.
- 沖森卓也 (2017) 『日本語全史』 筑摩書房, 東京.
- 大野晋 (1953) 『上代仮名遣の研究』 岩波書店, 東京.
- Riad, Thomas (2003) “Diachrony of the Scandinavian Accent Typology,” *Development in Prosodic Systems*, ed. by Paula Fikkert and Haïke Jacobs, *Studies in Generative Grammar* 58, Mouton de Gruyter, Berlin, 91-144.
- 佐藤大和 (2006) 「音韻およびその配置とアクセント—『柴田さんと今田さん』その後の考察」 音声文法研究会編 『文法と音声 V』 くろしお出版, 東京, 159-173.
- 柴田知薫子 (2014) 「平成生まれの日本語アクセント規則—音節優位のリズム感—」 『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』 第 63 巻, 79-86.
- 柴田知薫子 (2020) 「日本語史における平成時代の音韻変化」 『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』 第 69 巻, 101-109.
- 小学館国語辞典編集部 (2006) 『精選版日本国語大辞典』 小学館, 東京.
- 杉藤美代子 (1998) 『日本語音声の研究 6 柴田さんと今田さん』 和泉書院, 大阪.
- Vovin, Alexander (2008) “Proto-Japanese beyond the Accent System,” *Proto-Japanese: Issues and Prospects*, ed. by Bjarke Frellesvig and John Whitman, John Benjamins, Amsterdam, 141-156.

